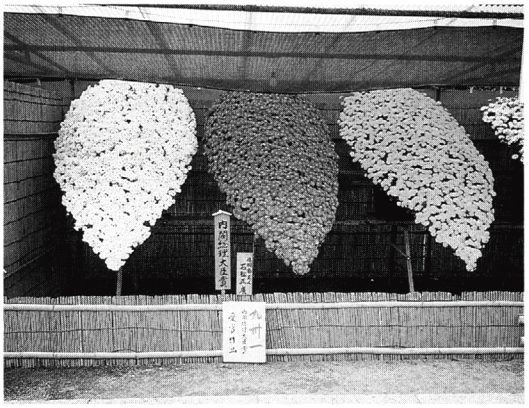
宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像社会
〒811-3505 福岡県宗像郡玄海町
電話 0940－62－1311(代)
http://www.munakata-taisha.or.jp/
定価 一年送料共 1000円

第三十一回 西日本菊花大会

＝内閣総理大臣賞に石松正廣氏＝



神郡宗像の秋を飾る当大社の神賑行事、西日本菊花大会（主催・宗像大社菊花会、後援・福岡県他）は今年で三十一回目を迎え、十一月一日より二十三日迄盛大に開催され、境内に遍く菊香が漂った。

大会開催にあたり宗像地区商工会青年部、菊花会有志の奉仕により展示用ハウスを設営し、福岡、佐賀、熊本、大分、長崎、宮崎、鹿児島、北九州、遠賀、宗像各地の協賛会社より提供されたトラックにて、九州各県の菊花愛好家が丹精込めた三千余鉢の菊花を搬入し、展示した。

また、昨年好評であった広報用の菊花壇は、東郷・赤間の二駅に加え今年は博多駅の東、中央の二ヶ所、小倉駅の合計五ヶ所で展示され、駅を行き交う人々にも鑑賞いただいた。

出品は大輪、盆栽、懸崖、特作、九州山口各県対抗大輪福助特別競技の五部門に分かれ、各々非常に厳しい出品基準、審査基準により作品の競技がなされた。

審査は十一月一日、福岡県農業試験場園芸研究所岡部正昭所長を審査長として行われ、まず「本年は七・八月の猛暑、九月の冷え込みで、寒暖の差が大きく、大きさ・色・形とも例年以上に美しい菊が多い。暑かった夏の影響で開花もはやまり、菊花大会開催時にはどの菊も最高の状態であった。」との講評がなされ、最高位である小泉純一郎内閣総理大臣賞は、懸崖部門の石松正廣氏に決定した。

また、各賞の受賞者は次の通りである。（敬称略）

内閣総理大臣賞
懸崖部門　石松正廣
農林水産大臣賞
盆栽部門　長谷川良治　菊寿会
文部科学大臣賞
大輪部門　生武静男　鳥花会
総務大臣賞
特作部門　徳永信子　宗像
法務大臣賞
特作部門　木浦勝夫　福岡
外務大臣賞
懸崖部門　佃俊美　田川
財務大臣賞
福助部門　山領松行　佐賀
厚生労働大臣賞
特作部門　船越順一　大野城
経済産業大臣賞
洋菊部門　見城秀樹　大野城
国土交通大臣賞
特作部門　籾井弘巳　田川
環境大臣賞
盆栽部門　馬場止晴　宗像
内閣官房長官賞
特作部門　古波蔵正忠　西部
衆議院議員山崎拓賞
特作部門　三口澄夫　宗像
衆議院議員渡辺具能賞
特作部門　松尾常喜　大野城
宗像大社宮司賞
桜木為生（田川）田中昭治（福岡）船越順一（大野城）御田良知（大野城）宮地隆治（佐賀）千々和正信（芳栄会）栗田義信（直方）
九州農政局長
懸崖部門　高地茂敏　菊寿会
福岡県知事賞
浜田豊子（福岡）石谷勲（田川）時田義光（鳥光会）
外務大臣賞
懸崖部門　佃俊美　田川
財務大臣賞
福助部門　宮地隆治　佐賀
熊本県知事賞
だるま部門　園田秋博　宇土市
長崎県知事賞
福助部門　一世勝幸　佐世保
福岡県議会議長賞
矢野政直（国芳会）田畑実志（南部）鳥巣敬次（菊寿会）永田ツルミ（宗像）
福岡県町村会長賞
石橋善治（福岡）天本吉明（鳥友会）小森一平（国芳会）木下みつ子（大野城）
福岡県町村議会議長会長賞
木浦勝夫（福岡）家宇治常規（福岡）赤金国弘（田川）竹内雪豊（国芳会）
福岡県教育委員会賞
坂本栄（水巻）重松勝善（宗像）籾井弘巳（田川）馬場園馨（宗像）
全日本菊花連盟賞
野林伸一（菊寿会）成田カオル（水巻）
九州・山口花卉園芸連絡協議会会長賞
高原良和（西部）寺下政國（鳥花会）深川ユキ子（国芳会）御田良和（大野城）
九州花卉卸売市場連合会長賞
稲永豊（福岡）石原一夫（国芳会）林長四郎（直方）石原睦男（宮崎）
福岡県農業協同組合中央会長賞
見城秀樹（大野城）中尾利夫（国芳会）石田進（直方）籾井藤子（田川）
（社）福岡県観光連盟会長賞
寺島隆生（宗像）西山時秋（門司）坪根弥一（国芳会）真崎憲（宗像）
福岡県農林事務所賞
木下みつ子（大野城）松野正徳（国芳会）渡辺道（直方）塩井朝人（小倉）
福岡県中小企業経営者協会長賞
松尾常喜（大野城）山口義實（西部）宮崎高治（芳栄会）重光由紀子（宗像）
福岡県高齢者能力活用センター賞
山本義雄（水巻）境正（宇土市）長井市雄（門司）古川清茂（佐賀）
九州旅客鉄道㈱賞
石丸五年（鳥花会）高山健次（筑豊）
福岡県花卉園芸連合会会長賞
関本和代（筑豊）冨金原正史（宗像）白川マナブ（国芳会）上野幸隆（宗像）
福岡県花卉市場協議会会長賞
倉田征喜（大野城）今村忠文（国芳会）石原睦男（宮崎）宇土菊枝（大野城）
粕屋地区市町長協議会会長賞
阿久根力（小倉）竹之内忍（国芳会）綱脇登子（宗像）山口勝喜（佐賀）
遠賀郡町長会会長賞
要博文（遠賀）下村運（遠賀）
宗像郡町村会会長賞
高山勉（久留米）岸本敏彦（若松）田中豊（筑豊）竹下チワ（宮崎）石田桂子（宗像）千々和正信（芳栄会）
宗像郡町村議長会会長賞
許斐保（筑豊）池上福元（門司）石橋徳芳（直方）原聰（鳥花会）
遠賀町長賞
安永儀三郎（若松）犬童重光（国芳会）
芦屋町長賞
竹内雪豊（国芳会）宮本正（宗像）
水巻町長賞
岩川健一（若松）白川マナブ（国芳会）
古賀市長賞
松尾正勝（直方）波多野松男（南部）
宗像市長賞
山根正雄（戸畑）陳内重義（佐世保）
津屋崎町長賞
妹川尚生（鳥花会）中島竹晴（佐賀）
福間町長賞
倉田征喜（大野城）生武静男（鳥花会）
玄海町長賞
橋上能和（宮崎）鈴木輝夫（小倉）菅邦重（佐世保）田中祐成（佐世保）松本文雄（大野城）古川清茂（佐賀）
大島村村長賞
妹川尚生（鳥花会）栗田義信（直方）
玄海町議会議長賞
時田義光（鳥友会）松尾勇（佐世保）瀬里士雄（大野城）見城芳子（大野城）
玄海町観光協会賞
堀川栄（宇土市）岡本典之（佐世保）大坪常憲（佐世保）藤井千秋（大野城）
宗像大社菊花会長賞
田代定（筑豊）堤勇孝（佐世保）鶴森哲夫（直方）
遠賀郡農業協同組合長賞
田代定（筑豊）堤勇孝（佐世保）石丸五年（鳥花会）岡田禎子（大野城）
宗像農業協同組合長賞
松尾勇（佐世保）寺下政國（鳥花会）緒方慶子（大野城）野村義光（国芳会）
宗像地区商工連長賞
松内英明（宇土市）
津屋崎町商工会会長賞
安部由夫（大分）
宗像市商工会会長賞
後藤勝司（大分）
福間町商工会会長賞
安田剛（宮崎）
玄海町商工会会長賞
川崎新一（宮崎）
大島村商工会会長賞
原聰（鳥花会）
宗像大社氏子会会長賞
宗像学習ネットワーク（宗像）園田秋博（宇土市）木村廣（大野城）
玄洋福岡ライオンズクラブ賞
岩下宗則（大分）成田カオル（水巻）宮野克巳（大野城）関本紘一郎（筑豊）
宗像ライオンズクラブ賞
下田一義（宇土市）橋上能和（宮崎）山本義雄（水巻）高島愛美子（芳栄会）
玄海ホテル旅館組合長賞
竹下チワ（宮崎）熊本健三（宗像）三口澄夫（宗像）安永儀三郎（若松）
宗像青年会議所賞
緒方迪吉（宇土市）波多野松男（南部）仰木保（水巻）
宗像地区商工会青年部長賞
見崎久義（大分）帆足富子（大野城）岩川健一（若松）片野坂博司（水巻）
中原ガーデン賞
堀川栄（宇土市）加藤重喜（大分）岸本敏彦（若松）松尾正勝（直方）
㈱サカタのタネ賞
竹下次男（宮崎）高山健次（筑豊）花田憲一（若松）立花清一郎（若松）
（有）マルタ小泉商事グリーンキング
グリーンソフト賞
玄海小学校（玄海）
ヨシカネ特別賞
酒井忠男（筑豊）
国華園賞
永島友昭（宗像）
太花園賞
花田清巳（宗像）
㈱フジックベラボン賞
堤静子（宗像）
㈱アミノール化学研究所アミノール賞
長谷川良治（福岡）石橋善治（福岡）
㈱フローラHB－101賞
堤静子（宗像）高島雪茂（芳栄会）
学校賞
玄海小学校
特別奉納
高島雪茂（芳栄会）自然流国芳会（国芳会）馬場園馨（宗像）千々和正信（芳栄会）
重複奉納作品
波多野松男（南部）倉田征喜（大野城）松尾常喜（大野城）妹川尚生（鳥栖花）栗田義信（直方）寺下政國（鳥栖花）原聰（鳥栖花）生武静男（鳥栖花）
宗像学習ネットワーク
梶谷清彦、永島加代子、中江良枝、占部正彦、半田茂之、森広喜、武田重矩、小方清利、林正博
宗像菊友会
馬場園馨、三口澄夫、吉田ヒラク、寺島隆生、綱脇倉子、宮本正、真崎憲、上野幸隆、冨金原正史、石田桂子、永田ツルミ、堤静子、廣末啓子、徳永信子、徳永信子、重光由紀子、永留良、花田清巳、
九州・山口各県対抗大輪福助特別競技
優勝　佐賀県　山領松行、宮地隆治、古川清茂

神具・装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
福岡店 福岡市博多区東公園一－三二－八一二－〇〇四五
電話 福岡（九二）六五一－九四五六番
本店 京都市下京区油小路六条北入 〒600－8231
電話 京都（〇七五）三四一－三三四一（代）四番

木の匠の技
総合建設業 株式会社 玄江組
事務所 〒811-3406 福岡県宗像市大字稲元一〇二五
電話（〇九四〇）三二－二五六七

余滴

野山の樹々が紅葉し爽やかな霜月、大社境内では各種の神賑行事が盛大に催された大勢の参拝者で賑った。

西日本菊花大会をメインとして吟詠大会・短歌大会・刀剣展・ガラス工芸展等々。中でも相撲大会は職員として感慨一入であった。

垂仁天皇の命により「野見宿禰（のみのすくね）」と「当麻蹴速（たいまのけはや）」が（力くらべ）を競ったのが今日の相撲の起源と言われる（日本書記）。

野見宿禰は、出雲国に住み「天穂日命」の子孫で、蹴速に勝ち、皇后崩御の時埴輪の制を案出し、土師臣を賜ったと言われる。

当麻蹴速は、大和国当麻に住み強力であったが、宿祢に腰を蹴折られ亡くなったと言う。共に相撲の祖として祀られ尊崇されている。

奈良・平安時代には相撲節会（毎年七月宮中に於て天皇が相撲を御覧になり、臣に宴を賜われる儀式）が行われていた。垂仁紀に「捧力（ちから）とらしむ」と有る。

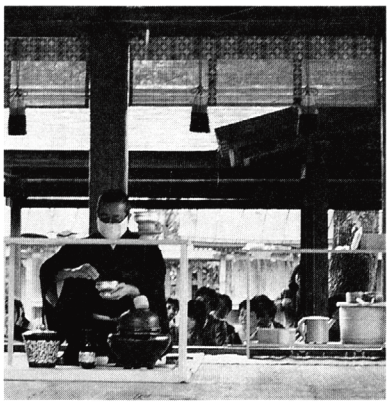
扨て、大社の相撲場は、昭和四十六年、遷宮祭記念事業として現在の地に建立され、盛大な土俵開き以来奉納相撲が続いたが、止むなく途絶えて久しかった。

県内のチャンピオンを決める今大会は、小学生より一般までが熱戦を展開、観衆を魅了した。中でも一般の部には、国体選手が取り組み、大相撲にも負けない迫力があった。本年最後の九州場所も順当に終ったが空席が目立った。

神事・儀式の起源を持つ国技の相撲。心・技・体を修練し伝統を継承して欲しい。神郡宗像の相撲再興の為にも…。

（S・I）

表千家奉仕 献茶祭斎行



秋季大祭の賑わいも落着きを取り戻し、宗像の山々にも秋の深まりを感じさせる十月十七日、当大社秋季恒例の献茶祭が斎行された。

この献茶祭は、例年表千家〔不審庵〕家元直々の奉仕により斎行されており、定期的な献茶の儀としては、九州地方では異例の事で、茶の道を志す者にとっては家元の御点前を拝観することができる待望の行事である。

この祭典は昭和三十七年、当時の宗像大社復興期成会長、故出光佐三氏の御尽力により実現して以来、出光興産株式会社奉納のもと恒例となり、今年で三十八回目を迎えた。

当日は、生憎の雨模様であったが、早朝より県内はもとより山口・九州各県の同門会々員をはじめ茶道に勤しむ人々が続々と参集し、境内は和服姿の女性達で華やかな雰囲気に包まれた。本年は、家元が体調不良につき、名代として表千家左海宗甫宗匠の御点前により執り行われた。

定刻十一時、一鼓を合図に奉仕の神職、左海宗匠以下介添役の家元関係者、出光興産株式会社出光昭介名誉会長他役員は祓舎にて御祓の後本殿へと参進、それぞれ所定の座に着座し、祭典開始。

斎主が祝詞を奏上、続いて献茶の儀が執り行われた。左海宗匠は拝殿にしつらえられた風炉前に端座し、切柄杓の手許違わず、淀みない清らかな御点前が披露されると、拝観者はかたずをのみながら真剣なまなざしで見入った。

雨音だけが残る静寂の中、点てられた濃茶、薄茶の二服が神職の手により神前に奉献された。献茶の儀の後、斎主、左海宗匠、出光名誉会長、同門会代表が各々玉串拝礼を行い、一時間余に及ぶ本年の献茶祭も厳粛裡に滞りなく終了した。

献茶祭終了後、参列者は儀式殿に設けられた出光席、また斎館の同門会席の副席へ参席し、茶席に掲げられた掛軸や茶道具の逸品を鑑賞しながらお茶を戴き「侘び・寂び」の境地に浸り、至福の一刻を楽しんだ。

今日の茶道は安土桃山時代に「千利休居士」が大成させたものと云われており、それ迄には様々な茶会茶席があったようである。

日本にお茶が入ってきたのは鎌倉時代の初めだが、茶の習慣が一つの道というような形になってきたのは室町時代である。

その頃の茶会は限られた一部の階級の人達のものであり唐・宋の名画・名品を鑑賞し、ご馳走を戴き、最後にお茶を喫するという豪華なものだった。

これに対し、「茶というものは遊び事や芸事ではなく、お茶を一服戴いて自分の心を清めるものという豊かなものでなければならない」というような簡素な茶席へ、との流れができてくる。そのような感性は、利休へと引き継がれ四畳半の侘び茶に代表される茶道の大成が実現したのである。

利休の茶道に関する考えや作法を伝える「南方録」という教えの中に「家は洩らぬほど、食は飢えぬほどにて足ることなり。水を運び、薪をとり、湯を沸かし、茶をたてて、仏に供え人にも与え我も飲む」とある。これは、薪、水も自分でとってきて茶をたてて、まず神仏にお供えし、訪ねてきた人があれば貴賤を問わず一服すすめて、最後に自分が飲むということである。

日本人は自然と共に生き、自然に従って生きることを理想とした。それを一碗の茶を飲むという行いに凝集したものが茶の湯であり、それを磨き上げた天才的思想家・芸術家が千利休であった。

その意味で利休は日本人の隠された心の顕現者なのである。利休の求めてきた姿をたどることによって、日本人としての自分自身の理想にあらためて気づくことができる。

沖・中両宮秋季大祭

菊の花咲き薫る十月三十一日（旧暦九月十五日）沖・中両宮の秋季大祭が斎行された。

十月二十九日早朝、沖・中津両宮奉賛会と敬神婦人部は、御嶽神社、沖津宮遥拝所の清掃、餅つき等の準備作業を行った。

翌三十日も朝から総出で境内の末社を始め各所の〆縄すべてを張り替え、午後からは演芸大会の舞台組み、敬神婦人部は大祭直会の下ごしらえと、準備万端整えた。

午後四時より中津宮境内で地主祭を斎行、午後五時からは、沖・中両宮の宵宮祭が執り行われた。

特に本年の沖津宮遥拝所の祭典は幻想的で、西に傾く太陽が水平線上まで降りて、海面が黄金色に輝き、一面夕暮れの海上彼方の沖津宮に向かい只管に祈念した。

大祭当日、午前八時半、宮崎地区の厳島神社祭、同九時遥拝所で沖津宮秋季大祭、又九時半より大島の最高峰に鎮座する御嶽神社祭が、それぞれ斎行された。

午前十時、中津宮の斎館玄関前に並んだ太田宮司以下神職、氏子奉幣使、奉賛会役員は、中津宮拝殿に参進、宮司祝詞の後、斎服に威儀を正した本年度の奉幣使、翼賛会会長上野美実氏が奉幣詞を奏上、続いて巫女による浦安舞の奉納、宮司の玉串拝礼、約三百人参列の中から四十名が代表して玉串拝礼、敬虔なる祈りを捧げ、無事祭典を終了した。祭典後、照海殿で直会が催され、本年の秋季大祭も盛大裡に終了した。

また、午後一時半より各区より選ばれた芸達者による奉納演芸大会が催された。飛び入りを含め、各々の十八番が奉納され、神人和楽の神賑いも拍手喝采の内に終わり、大島の秋の一日が暮れた。

沖ノ島参道修復工事

玄界灘の真只中でポツリと浮かぶ沖ノ島に宗像大社沖津宮が鎮座されている。

常駐神職は急坂な石段を登り祭りを行っているが、何しろ絶海の孤島故風雨も強く、参道の傷みも早い。

去る十一月一日は早朝四時、月明りが残る大島を船出、参道修復人員十八名〔沖・中両宮翼賛会長上野美実他〕は二隻の船に便乗し、一路沖ノ島へ。

沖ノ島が真近になる頃、激しい雨、波も出て時化の兆し。〝何んとか上って欲しい〟の一念に天祐有りか、通り雨でホッとする。

接岸と同時に資材の搬出、ブロック、セメント、砂、石、ミキサー等々。何しろ動力は一切無い。人力にて小高い参道行レーにて上げたり、力自慢に運んだりと、休む間も無く資材を運び上げる。一息ついたところで、持参のオニギリにて腹を満たす。

参道木橋を石段に改修班、両手バケツにセメントを入れ、本殿まで上り順次参道石段の補修班と…登り降りに足がガクガク、と言うものの日頃鍛えた足腰は流石、石段の基礎を固め階段積みに入る。強固に鉄筋を入れ段取りよく工事が進む。

何しろ絶海の孤島故のんびりとはいかない。何としても一日半で完工しなければならないので気も逸る。三時過ぎ思ったより早いペースで進みメドが立った。

西に陽が沈みかけロマンチックな頃最後のブロックを積み完了、暗くならない内に道具を下ろし早々に乗船。沖ノ島を出港した。

五月の現地大祭を始め、来島の参拝者が今までよりは容易に登りやすくなった参道、今後は合間を見て手直ししていきたい。

北野天満宮内「宗像社」御社殿の造り替え

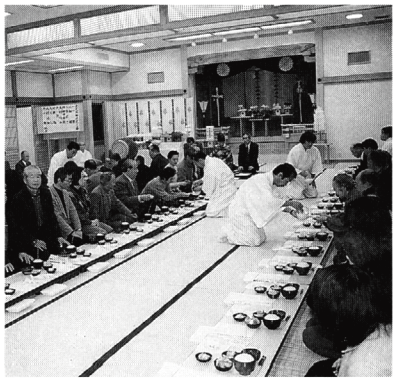
九州の太宰府天満宮と共に菅原道真公を祀る神社の双璧とされるお社が、京都市上京区に鎮座されている北野天満宮である。

豊臣秀頼公が再建し、現存最古の権現造り社殿として国宝となっている本殿。同じく国宝で、昨近の「天神様の美術展」でも目玉とされた「北野天神縁起」を所蔵することで有名なお社である。

この北野天満宮の絵馬所の西側、大杉社と背中あわせに当大社の分祀社である「宗像社」が鎮座されている。

御由緒は「明治維新前、社殿の西の池に五輪塔があり、水底に弁財天が祀られている」との伝承があり、明治に入って五輪塔を取り除いて社殿を造営し、宗像三女神をお祀りしている。

今回、永年の風雨に痛んできた御社殿を造り替えることとなり、銅版葺の屋根を張り替え、階段の歪みを直し、脇障子をつけ替え、飾り金具を取り替え、朱塗りの美しい社殿が甦った。



当大社邊津宮の御本殿をそのまま縮小したような見事なもので、女神にふさわしい優雅なたたずまいを醸し出している。

古式祭のご案内

古式祭とは、今年最後の収穫感謝祭のことです。氏神様へ一年間の神恩を感謝して今年の収穫物を捧げ、忌火で炊いた御飯をお供えし、氏子の人達が一緒にいただく神事です。

この神事は、宮中に於て天皇陛下が神嘉殿にて新嘗祭を行われておられるのと同じ性質のものです。

この古式祭は又「延命招福」の集いともいわれますが、氏神様と共にこの一年間の喜びを分かちあうといった「神人和楽」を共にする、年に一度の集会であることに意味があります。

八百年以上の伝統をもつ宗像大社の古式祭には、特に〝お菓子〟と呼ばれる、九年母、菱餅等で作られた特殊神饌や、江口の浜よりあがる〝ゲバサモ〟という海藻をお供えして、お座を催すのが古来からのしきたりです。又、くじも行われ、翁面・御神盃などが授与されます。

記

一、日　時　十二月十六日（日曜日）
　　祭典　午前六時
　　お座　午前六時三十分
一、場　所　祭典　本殿　お座　清明殿
一、お座料（一名分）　金二、〇〇〇円

出光興産(株)
創業九十周年慰霊祭

錦秋の十一月三日（土）、出光興産株式会社創業九十周年に伴う物故者慰霊祭が東京プリンスホテルにおいて、同社代表取締役社長出光昭氏、同名誉会長出光昭介氏、御遺族代表を始め同社役員、社員並びに関係者多数参列のもと、当社太田宮司以下神職六名の奉仕により厳粛に斎行された。

同社は、明治四十四年福岡県門司市（現在北九州市門司区）にて出光商会として発足。爾来創業者故出光佐三店主の「人間尊重」「大家族主義」の卓越した経営理念のもと、我が国民族系石油会社の雄として「消費者本意」の営業方針を貫き、世界のメジャーと対等に事業を展開。本年創業九十周年を迎えると共に出光佐三店主が亡くなられて二十年にあたる、節目の年の事業として記念式典、物故者慰霊祭が執り行われた。

慰霊祭は、午前十時三十分太田斎主以下祭員が参進、祭場所定の場に着座。同社江端総務部次長の司会進行により祭典を開始、開式の辞、修祓の後創業者故出光佐三店主並びに八十周年以降の物故者の御霊を迎え、太田宮司が御霊の平安と同社の業務安全・業務繁栄、更には御遺族の安寧を祈念し祝詞を奉上した。

続いて代表取締役社長出光昭氏が「創業以来連綿と継承してきた『人間尊重』の経営理念のもと店主の訓えを忠実に実践し、国家、社会のため、ひいては世界のために社員一丸となり全員仲良く協力して努力してまいります。」と祭詞を奏上された。

次いで太田斎主以下祭員玉串拝礼に続き、出光昭社長に併せて同社役員以下社員が、また出光昭介名誉会長に併せて御遺族、出光会、光友会、顧問の方々が玉串拝礼を行った後、送魂、閉式の辞を以て同社九十周年物故者慰霊祭を滞りなく斎行した。

慰霊祭に引き続き、同社創業九十周年記念式典、同祝賀会が挙行され、席上出光昭介名誉会長が「世界は、規制の世の中から、自由経済の世の中、人が中心となって規則や機構を使っていく方向に進んでいる。出光店主が当初から言っていたことが生かされる世の中になった。出光の真価がいよいよ発揮されるのではないか。」と述べられ、同社の更なる飛躍を願われた。午後一時三十分、百周年に向かっての決意も新たに祝賀会を閉会し、出光興産株式会創業九十周年の全ての行事を無事終了した。

玄海中学文化祭にて浦安舞

宗像大社のお膝元、玄海中学校では文化祭二日目の十月二十一日、初めて女子生徒による浦安舞が舞われた。

当大社の春と秋の大祭では毎年同校の二年生四名の奉仕によって奉納されている。大祭一ヶ月前になると選定された女生徒が、授業を終えると自転車で来社し、巫女より指導を受けている。

春はそれこそ一からのスタートであり、西洋音楽に馴れている現在の子供に日本独自の「和」のメロディー、それに合せて舞うという感覚を身に付けることから始まる。世界平和を願い優雅に舞う浦安舞は、想像以上に体力を使い、しばらくは筋肉痛に悩まされる。

秋の大祭時には春と比べて細かな点にも指導を受けて、より優雅に舞われる。今秋も十月三日の秋季大祭三日祭で滞りなく奉納された。しかし、せっかく身につけた舞を、神前奉納当日、授業のため見ることの出来なかった先生や生徒による強い要望で文化祭での実現となった。

事前に、立つ位置、鈴の置き場所等の詳細な打ち合わせを行い、リハーサルをし、この初の試みの準備を整え、当日女生徒達は十二単の正装姿にて体育館のステージに登場、全校生徒、保護者の見守る体育館のステージ上で優雅に舞われた。

幻想的なスポットライトを浴びて壇上で舞う四名の生徒に、先生も生徒も保護者も息をのんだ。通常御神前で舞われる為、背後、側面からしか見たことがなく、初めて正面で見ることができたが一層浦安舞の美しさを感じた。

そして、何よりも舞う直前まで「恥ずかしい」と言っていた生徒達が、終えると「良かった、もう一度舞いたい」と口々に言っていたのが、何よりも印象的であった。

本年の文化祭のテーマは「チャレンジ～無限の可能性！」であり、生徒、先生方、保護者と学校全体で取り組んだ初の試みは、大成功であった。

河東中学校一年生
宗像の伝統芸能について学習

十月十五日、宗像市立河東中学一年生十八名が来社し、"宗像の伝統芸能"について学習した。

年間七十時間ある総合学習の授業の一環で、河東中学校では宗像の「言葉」「歴史」「料理」「福祉」「伝統芸能」の各分野ごとにテーマを決め学習しており、当社に訪れた生徒はその中で「宗像の伝統芸能」を選択した仲間達である。

午後二時、担任の高橋真理子教諭に引率された一年生の女生徒十八名が来社。神職二名が応接し、まず本殿へ進み高橋先生に併せ拝礼、早速国の重要文化財である邊津宮本殿・拝殿の歴史について説明を受けた。

次に神宝館に於いて、古代から現代までの宗像大社の歴史について学んだ。特に沖ノ島出土の祭祀神宝は、教科書にも紹介されており、約十二万点もの神宝の中でも、女性である為か鏡・金指輪・勾玉類等の装飾神宝に興味を示し、更に収蔵・展示品の殆んどが国宝・重要文化財に指定されていることに驚き、皆真剣な表情で初めて目にする数多くの神宝に対し、何かを探求しようとする眼差しが非常に印象的であった。

続いて、斎館へと場所を移し、当大社春秋の大祭で奉納されており、全国で唯一伝承保存され、保存会々員により奉納されている「主基地方風俗舞」。神宝の翁面を着け、能装束で演じられ、約四百年の伝統を持つ「翁舞」。世界の恒久平和を願い、地元の女子中学生により華麗に舞われる「浦安舞」の三つの神楽舞について大型スクリーンの映像を見ながら学んだ。

例年春秋の大祭で、地元玄海中学校の二年女子生徒が奉納する浦安舞は、同じ中学生とあって特に興味深く見入っていた。

春秋の大祭、新年の初詣等で、大半の生徒が一度は参拝したことがあったが、宗像大社でこのような舞が奉納されていたことは、ほとんどの生徒が知らなかったとの事。

今回の実地学習では宗像の歴史・伝統・芸能において、宗像大社が大変重要な存在で有ると同時に、自分達の誇りにしてゆきたいと有意義な学習となったようだ。生まれ育った故郷である神郡宗像をこれからもっと愛していただきたい。

第四八五回　宗像大社歌会詠草

大野展男　選

毎月25日〆切

福　間　池浦千鶴子
機上より見おろす人家も遠のきてもはや下界とかかはりもたず

（評）離陸から水平飛行に移る一瞬の浮遊感をうまく詠っている。下界の景も読む人々の経験と重なる既視感を与える一首である。

朝　野　藤井　浩子
浴室に蜘蛛すみつきて少しづつ大きくなりぬ何食べゐるや

（評）餌となる虫など何も居ないだろうと思はれる冬でも姿を見せる黒く小さい家蜘蛛は目に見えないダニ類を食べていると知ったら作者も安心だろう。虫の世界の不思議を率直に述べたところがいい。

田　野　森　甲子
働きたての土塊に張る蜘蛛の糸朝露に濡れ白く光れり

（評）こちらの蜘蛛は地蜘蛛か、土塊と土塊の小さな空間に素早く巣を作る。朝露に光る小さな景をきちんと描写している処がいい。作者の目が働いている。

日の里　大和美由紀
秋風に湿原の葦揺れ合いて澄みし音色の楽を奏でる

（評）秋風に揺れる葦群に音楽を聞いたとする作者の感性は素晴らしい。豊かな心のゆとりが感じられる。

日の里　石松　弘次
夕暮れの中空を翔ぶ鳩の群れひるがえる時光を放つ

光陽台　香月　照子
かさかさと枯葉舞う日はあたたかき焚き火の炎よみがへりくる

光　岡　井上　嘉治
彼岸花一輪背負いし御地蔵にそよ風吹きて秋は深まる

曲　天野　玲子
黄に熟れし稲田を見つつ散歩する夕べはすでに風の冷たし

池　田　小田　イセ
歌はリズムと教えられたる師の言葉心に止めて励まむ吾は

城南ケ丘　中間日出子
パソコンを覗いてみたくて挑戦しまだ六十の齢を喜ぶ

福　間　中村　勇
夜は過ぎてなほ学びをるやマンションの窓の灯り一つ今夜も点る

日の里　石松　知子
暗き世の道を照らすを希いつつ老いのまなこに仰ぐ満月

名古屋　小田　留子
したたかに生き来しものか変形し節高き手をいとしみて見る

名古屋　小田　喜一
限りある命淋しく受け止めて雨夜に細き遠虫の声

大島　越智　治子
夜の海に光の波はゆれ動く鳥賊釣る船の数多ければ

光　岡　小森テル子
台風の逸れし平野の一面は風にそよぎて黄金葉ゆるる

光　岡　森田富佐子
秋雨の降りをる夜半はカーテンを少し開きて朝明けを待つ

光　岡　河村　久光
秋くれば見渡すかぎり黄金色窓より眺むその黄金田を

武　丸　中村さつき
公務員の孫は公用にてアメリカに出発の前テロあり中止に

鐘　崎　安永　久子
裏側の地球ゆるがすテロ行為対岸の火事と言えぬ不気味さ

自由ケ丘　土井眞由美
枕抱き目覚めの予感は再びに今日みた夢にアイシャドーも暈す

日の里　佐藤　純一
吾の名を囁人目は見つめ合い歩みはじめるゆかしい日々を

〈ご案内〉

この社報「宗像」に掲載する短歌・俳句を毎月二十五日締め切りで募集しています。御希望の方は、宗像大社歌会まで御送付願います。また、短歌の勉強会である互選会も、毎月第三土曜日に当大社斎館にかて開催しておりますのでどうぞご参加下さい。

宗像大社歌会 俳句作品集（四六〇）

東郷　三浦美千代
ゆっくりと三毛猫歩む草の花

東郷　田中　雨葉
行く舟か消す雲の影水の秋

東郷　木原　房子
秋水をたたへ平の遠賀川

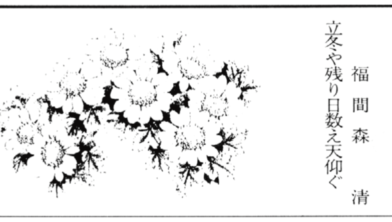
東郷　吉武　湧泉
敬老日はげます幼の祝い文

東郷　中野　きみ
故里の神の苑なる菊花展

東郷　吉田　杏子
ゆく秋や曇る鏡を磨きけり

東郷　田中　憲象
白矢鳴る流鏑馬の的仰ぎけり

福間　森　清
立冬や残り日数え天仰ぐ



（続）浜の寄物 162

いしいただし

十月上旬、谷川健一氏（民族学者・日本地名研究所）の主宰される青の会が、宮崎県・青島で交流会を行ったので、それに参加した。

土曜日だったが、列車はガラガラだった。宮崎駅から日南線にのりかえて青島駅をおりた。少し海岸の方を歩くと、青島が見えた。青島へ行く人も少なかった。青島は二十数年ぶりだった。

海岸を歩いてみた。海沿いの巨大なホテルは閉館していた。近くにも崩れたような建物もあったので、これも倒産したホテルであろう。青島周辺もなんだか元気がない。

かつて観光宮崎として、昭和三十年代は、新婚のメッカであり、九州各県の修学旅行のコースでもあった。埴輪公園、青島、子供国、西都原古墳公園等は人気も高く賑わった。宮崎のバスガイドは日本一とまでいわれた時代が続いた。だが日本経済の発展と共に、新婚旅行のメッカは、沖縄へ、ハワイへと移っていったのである。

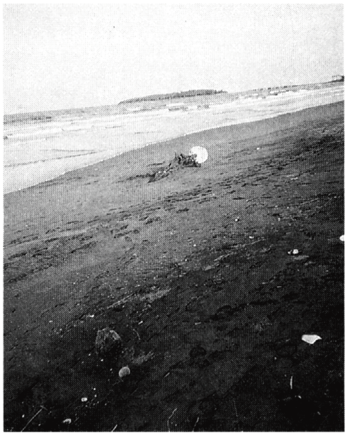
青島の周辺は、ゴミはなかったが、倒産したホテル前の海岸はゴミだらけ。漂着した流木や石がゴロゴロしているのには驚いた。宴会で私の横に座した関東から来たという夫婦も「海岸を歩いてがっかりした」と話していた。海では太平洋の荒波を利用してサーフィンを楽しんでいる若者達がいたが、彼等はこの荒廃した海岸は気にならないのかと思ったし、観光宮崎の厳しい姿を表わしているようにも思えた。

ここの海岸で完形のココヤシ一個、モモタマナ一個が漂着していたのを拾った。また長さ五メートルほどで板根をつけた南洋材も流れついていた。

中国の橙色・青色のプラスチック浮子は玄界と同じように多く見られた。台湾製の羊乳ビン、プラスチック製化粧容器などもあった。

台湾製のプラスチック製浮子は長さ一七・五センチ、最大幅二・五センチ、細長いもので、中央に青天白日旗が陽刻され左右に推翻、暴政、裏も国旗と、反共、必勝とあった。浮子はエボシガイやカキ殻も付着していたので、かなり長期間漂流していたのであろう。

帰って記録ノートをめくっていたら一九八六年十一月に、福岡市海の中道で、少し小さいが、やはり青天白日旗を中央に争取・自由・団結・反共と陽刻されたプラスチック浮子を拾っている。台湾は一九九一年五月一日に内戦終息宣言をして、プロパガンダを入れて中国大陸にむけて海に流していた海漂器も中止となり、今も時折り流れつくのはそれ以前に流されたものであろう。


青島とココヤシ漂着

青島ではプラスチック製のライターも拾った。一九九九年十二月二十日に、ポルトガル領澳門（マカオ）が中国に返還された時の記念ライターである。

九九、一二、二〇

澳門記念とあった。香港が一九九九年七月にイギリスから返還された時にもそれを祝うライターが玄界沿岸に漂着したので、若しか澳門のも漂着しないかと注意していたが、青島で拾うとは思わなかった。

澳門は中国広東省中山県の南部、珠江の河口三角州の南端に突出した南北約五キロメートルにわたる半島、水道をへだててホンコンと対する。その前面にあるタイパ、コロワン二島をあわせてポルトガルの殖民地であった。（世界大百科）

澳門は十六世紀後半から、ゴア、マラツカと共にポルトガルのアジア貿易の拠点地であったところで、一時は非常に栄えた時期もあった。一八八七年に修好条約でポルトガルは澳門の永久管理権を獲得、主権が確立された。その後中国の強大化と共に返還要求がなされ、ついに一九九九年、ポルトガルの手から約四六五年ぶり、修好条約からでも一〇四年ぶりに中国に戻ってきた。

宮崎の旅、成果は二つの歴史を拾ってきたことである。

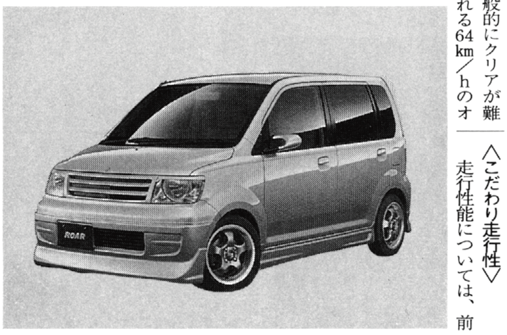
話題の車紹介

三菱「ekワゴン」

今回、皆様にご紹介する車は、開発者の『真に「いい車」をつくろう』という願いがネーミングにまで込められた、三菱の新型軽自動車ekワゴンです。

ekワゴンはそのネーミングの通り、あらゆる部分まで念入りに、今までの軽自動車の枠を超えて、本当に満足できるクルマへのこだわりを凝縮し、造り上げられました。

〈こだわり安全性〉
三菱の衝突安全強化ボディRISEを採用し、厳しい衝突安全基準をハイレベルでクリア、クラストップレベルの安全性を確保しています。一般的にクリアが難しいとされる64㎞/hのオフセット衝突では、リッターカーをも凌ぐ安全性を実現しています。また、運転席・助手席にSRSエアバッグシステムを標準装備としました。



〈こだわり走行性〉
走行性能については、前項で述べたボディの衝突安全性能の向上に伴い、飛躍的なボデー剛性の向上を実現できた為、今までの軽自動車にない、「カチッ」とした質感のある走りと乗り心地を生み、街中でも山道でも運転が楽しいクルマに仕上がりました。また静粛性もクラストップレベルです。

〈こだわりスタイリング〉
ekワゴンは、『セミトール・ロングルーフ』という新しいスタイル。車高を一五五〇㎜に抑えたこのスタイルは、十分な居住空間を確保しながら、ほとんどの立体駐車場にも対応できるこれからの軽ワゴンの新しいスタンダードです。

〈こだわりインテリア〉
三菱初のセンターメーターを採用し、運転席ドアには世界初?!プチごみ箱を装備。スケルトンタイプのカップホルダーはペットボトルまで収納可能なマルチタイプです。この他、多彩な小物入れなど細部にまでこだわったインテリアはおしゃれなだけでなく実用性にも富んでいます。

〈こだわり室内の広さ〉
室内長だけではなく、十分なレッグスペースと余裕のヘッドクリアランスを持つなど、小型車クラスに匹敵する快適空間を確保。また、前席シートを一番後ろまでスライドさせても、後席の膝まわりはたっぷりとスペースが確保されており、そのゆとりは軽自動車とは思えないほどです。

このように魅力のつまったekワゴンは、1エンジン・1グレード、3ATのみとコストダウンを図ったおかげで、価格も**91万円**と大きな魅力になっています。

また、ボディカラーは九色用意しておりますので、きっとお気に入りの一台が見つかるはずです。二〇〇一年～二〇〇二年グッドデザイン賞にも選ばれた、自信を持ってお勧めするekワゴンを、是非一度、見て、触って、確かめてみてください。きっと気に入られるはずです。

～お問合せ先～
九州三菱自動車販売㈱　宗像営業所
宗像郡福間町中央一丁目二十番十二号
☎〇九四〇―四二―一二二三

神郡宗像 末社めぐり

二十　須多田神社（天降天神社）

宗像大社から玄海勝浦線（通称逢坂峠）を、前号の勝浦嶽神社を右手に眺めながら国道四九五線に抜け、津屋崎方面に田園風景の中約二、五キロ程走ると須多田区という標示板が見えてくる。その手前を左折し、小道のなだらかな丘を四〇〇メートル程上ると、左手前方にこんもりとした森があり、手前には風雨にさらされ、額字も定かでない石鳥居が見える。

参道を進んで石段を上り、「天降神社」の扁額のかかった石鳥居をくぐると、床面の高い拝殿がある。

この神社は、前方後円墳の後円の部分を御神体山として奉斎している社で、拝殿のみで本殿は無く、石段の上に祠があり、さらに奥には原生林が覆い茂り、宮山となっている。

宗像神社史によると、御縁起に百八社の一つとして、高宮下符社のうちに、「右十一番須多田明神社」と見え、正平年中行事に七十五社の一つとして、上高宮下符社のうちに「須多田明神」、同高宮下符神事の條にもその名を見ることが出来る。

また延寶末社帳には、「須多田明神　猿田彦命」とし、続風土記附録宗像郡上須多田村の條には、「須多田明神　ヤマキワ　昔は産神なりしが、今はしからすといふ。」とし、同拾遺十九には、「須多田村にある須多田神社をもって、宗像末社記にいふ百八神の一つである。」としている。

明細帳には、「須多田神社（舊無格社）は津屋崎町大字須多田字上ノ口鎮座、祭神、神直日命。これ往昔の須多田明神であるとする。現今、津屋崎町大字須多田鎮座の天降天神社（舊村社、祭神、少彦名神）をもって本社に充てる。」と記されてある。

この神社が鎮座している古墳は、天降天神社古墳といい、この他須多田地区にある二タ塚古墳・ミソ塚古墳・下ノ口古墳・上ノ口古墳の計五古墳は全て、往古この近くまで入り海があったとされ、行き交う船を見下ろせるように造られたようである。

その中でもこの天降天神社古墳は、最大級の全長八十三メートルを誇り、周りには壕が巡らされた跡があり、あたかも城が築かれていたように見え、王墓のみから出土する円筒埴輪と装飾器台等も発見されている。

また福岡県地理全誌によると、「簾長者宅址として、天降神社の後にあり、周に堀の跡あり。城址の如し。簾長者と云う富人住し所と云伝う。村の名を須多田と云も、此より転せるなり…」と記され、さらに筑前国続風土記にも「此地に宮山あり、廻りに堀二重をほりまわし、四方に門を有し址あり。ひくき山なり。城址の如し。昔、此辺に簾（スタレ）長者と云、富人ありしと云伝う。其故に村の名をも簾田と云うにや。これより転じて須多田と云うなり…」と簾長者の名が見え、村名の由来と記されている。

現在も御神体山周囲には堀のあとらしきものが見られ、鳥居周辺にある苔むした庭石等も、簾長者の往古をしのぶ遺物であろうと思われる。

御祭神は少彦名命。例祭は一月と九月の二十八日に宮座を営んでいる。拝殿の右奥には、平成十三年六月に須多田辰ヶ鼻から合祀されたばかりの保食神社・彌勒様・御塚様が鎮座している。

厳かな御神体山に通じる石段の元には、氏子からの緑色美しい榊と水がお供えされており、文字通り産神のお社と感じた。